22100149

International Baccalaureate®
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional

JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Thursday 13 May 2010 (afternoon)
Jeudi 13 mai 2010 (après-midi)
Jueves 13 de mayo de 2010 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento.

© International Baccalaureate Organization 2010

https://xtremepape.rs/

次の1の文章と2の詩のうち、どちらか一つを選んでコメンタリー（解説文）を書きなさい。

1.

ミドリ公園に行く途中の藪で、蛇を踏んでしまった。

ミドリ公園を突っきって丘を一つ越え横町をいくつか過ぎたところに私の勤める数珠屋「カナカナ堂」がある。カナカナ堂に勤める以前は女学校で理科の教師をしていた。教師が身につかずに四年で辞めて、それから失業保険で食いつないだ後カナカナ堂に雇われたのである。

カナカナ堂では、店番をする。仕入れやお寺さんの相手は店主であるコスガさんが行い、数珠づくりはコスガさんの奥さんが行う。雇われた、というほどのことはなく、つまりはただの店番である。

蛇を踏んでしまってから蛇に気がついた。秋の蛇なので動きが遅かったのか。普通の蛇ならば踏まれまい。

蛇は柔らかく、踏んでも踏んでもきりがない感じだった。

「踏まれたらおしまいですね」と、そのうちに蛇が言い、それからどろりと溶けて形を失った。煙のような曖昧なものが少しの間たちこめ、もう一度蛇の声で「おしまいですね」と言ってから人間の形が現れた。

「踏まれたので仕方ありません」

今度は人間の声で言い、私の住む部屋のある方角へさっさと歩いていってしまった。人間のかたちになった蛇は、五十歳くらいの女性に見えた。

カナカナ堂に着くとコスガさんがシャッターを開けているとこで、奥ではコスガさんの奥さんのニシ子さんがコーヒーを挽いていた。

「今日は甲府まで行くので、よかったらサナダさんも行きませんか」とコスガさんに言われた。ときどきコスガさんのバンに一緒に乗って数珠の卸しに行くことが今までもあったが、ごく近い場所ばかりだった。甲府というのは、遠い。

このところニシ子さんは浄土宗の数珠をいくつもいくつも作っていた。前の日には、ようやく完成したその二百の数珠を箱に入れ包装したのである。どうやらそれを届けに行くらしかった。

「願信寺から少し足を伸ばすと温泉もあるし」コスガさんはそんなことを言った。「ニシ子も一緒に行くか。店休みにして」

コスガさんは、すぐにこんなことを言う。ニシ子さんは答えずに笑っていた。ニシ子さんは六十過ぎだが、白髪も少なく、八歳年下だというコスガさんよりも余程若く見え

https://xtremepaper.rs/

る。コスガさんが若い頃修業にと入った京都の老舗（しにせ）の数珠屋の奥さんで、数珠も作るし、店もきりまわすし、その店の若旦那があまり店に寄りつかず外で遊んでいるのに朝から晩まで休む間もなく切り盛りをしていたニシ子さんにコスガさんが横恋慕（れんぼ）して、結局数年後修業を終えたコスガさんがニシ子さんを口説（くど）いて駆け落ちをしたという昔話を聞いたのは、店に勤めはじめてから数週間後だった。この駆け落ち話を店に来るたいていの客――主にそれは得意先のお寺さんであるのだが――は知っていて、いまだに「ご夫婦仲のいいことでよろしいなあ」と軽口を叩かれたりする。コスガさんはそれに対しては「なんまんだぶなんまんだぶ」などと口の中で唱え、ニシ子さんは黙って微笑んでいる。

こういう事情があるので、ニシ子さんの数珠づくりの腕は関東では一番と言われているにもかかわらず、カナカナ堂は辺鄙（へんぴ）なこの土地でほそぼそと商売を続けているのであった。

「蛇を踏んでしまいました」

寺からの帰り道、高速道路のサービスエリアでアイスコーヒーを飲みながら私が何気なく言うと、コスガさんが驚いたように「あれっ」と叫んだ。

「その蛇、それからどうしたね」

両切りのピースをくわえながら、コスガさんはゆっくりと禿げあがった額をてのひらで撫（な）でであげた。

「それから歩いて行ってしまいました」（中略）

「サナダさん、それどんな蛇だったかね」

ダンプカーの警笛が汽船の霧笛のように聞こえる。海辺のレストハウスにいるような感じがした。

「中くらいの蛇でした。柔らかくて」

コスガさんは少し頼りないような表情になったが、それ以上何も言わず、ふたたび広い額をてのひらで撫であげてから、席を立った。バンに乗るとコスガさんはラジオをつけた。株式市況が終わり、ポルトガル語講座が始まるころに私はうとうととして、もう蛇のことは忘れていた。カナカナ堂についたのは、英会話の途中であった。

（川上弘美『蛇を踏む』一九九六）

https://xtremepape.rs/

2.

満開のサクラに降る雨の中で

漆黒の天から小止みなく雨がふっている。
樹という樹のすべてにサクラがけぶっている。
ほんのり紅をさした花という花のすべてに
やわらかな銀の糸に似た雨脚がけぶっている。

枝という枝のすべてに満開のサクラが照明されている。
光を浴びた花々が目路のかぎり、
夢のように漆黒の天の下にひろがる
花々の間に私は迷いこみ、立ちつくす。

私は満開の花々の声に耳を澄ます。
花々は無数の死者たちの幽魂であり、
雨音にかき消されがちなかれらの声の中から
私はただ一人の声を聞き分けようと耳を澄ます。

漆黒の天から小止みなく雨が降っている。
光を浴びた花という花のすべてがけぶっている。
ただ一人の声を聞き分けようと耳を澄ますのだが、
ついに私は聞き分けることができない。

私がもどかしく満開のサクラの花々の下に立ちつくせば、
いつか私自身の幽魂が私から遊離し、
光を浴びた花々の間をさまよっている、そして
ただ一人の声をさがしあぐねている。

（中村　稔『新輯・幻花抄』二〇〇一）

https://xtremepaper.rs/